

---

# 価値

昭成

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

価値

### 【コード】

N80740

### 【作者名】

昭成

### 【あらすじ】

価値って何だろうね、という話      いや、違つかもしれない。

「ねえ、『価値』って、何？」

放課後の教室で、彼女にそう言われた。

彼女といつても、いわゆるお付き合ひ的な『彼女』ではない。

満場一致で選ばれた、クラスの『委員長』。それが、彼女だ。

そして、同じく満場一致の欠席裁判で選ばれた不幸の申し子、『副委員長』。それが俺。直接民主制の正負の側面が一度に出た貴重な『委員決め』だったらしい。職業選択の自由を失ったマイノリティ（一名）は、えらく不幸な被害者なのではないかとも思うが、学年スタートの新メンバー相手に波風立てるほどの度胸はなかったために、現在のクラス委員編成で落ち着いている。

まあ、そんなことはどうでもいいか。

「私は、『価値』というものに、価値はないと思うの。……でも、それを追い求めるということには……やっぱり価値があると思うの」「こちらへ近づきながら、再び彼女が話しかけてきた。返事がないのを不審に思ったのかもしれない。ともあれ

「いいか？　そういうのは『オチ』で言うもんだ。最初から結論を持つてくる説教方式はやめておいたほうがいい。……離れるぞ？」

「離れる？　……何が？」

まあ、そりゃそうなるか。

「……いや、やっぱいい。上手く言えないが、俺たちの存在に関わる、とだけ言うておく」

「むう……？」

さすがに脈絡がなさすぎたらしく、首を傾げられた。

小首をかしげている人畜無害そうな委員長。初めて話したときに『人間とは何か』と聞かれて（第一声としてはどうだろうとも思っただが）以来、こうして放課後に何となく『答えのない話』をしている。

これが、習慣になっていた。

「まあ、とにかくだ。『価値』の話に戻そうじゃないか。な？　そうしよう」

さっきまで不審がっていた彼女だが、話題を戻すと、改めて聞いてきた。

「じゃあ、『価値』って、何？」

「さあな」

「え……ずるい。『放棄する』のは、ルール違反のはず。ちゃんと答えて」

ちなみに、答えがないにもかかわらず、『答えを出さない』のは『ルール違反』だ。

いつのまにか設定されていた『ルール』について、俺は一切関知していないのだが、どうせ毎回『答えがない』ため、実際のところは午後の五時のチャイム　タイムアップまで、雑談で暇潰ししているというだけだ。

答えが出ない雑談だけに、適当にノリだけで喋っていることも多い。

「そうだなあ……たとえば、バリューセットだな」

「ワツクの？」

「そう、ワツクのアレだ。原価もほとんどかかってないポテト。調味料で強引にごまかしたソースたっぷりのバーガー。業務提携でほとんど金のかかっていないジュースをつけて……それでも、客が来る。つまり、『価値』があるってわけだ」

「ジャンクフード批判が関係あるとは思えないのだけど」

心底不思議に思っついそうな表情をしていた。

「まあ、落ち着いて聞け。……そんなバリューセットだが、面白いのは　セットにすることで『価格』を下げて『価値』は上がっている。しかし、そもそも材料からすれば『価値がない』と言われるようなものを売っているジャンクフード様なわけだ　さて、この場合は、どの『バリュー』だと思う？　『バリュー』は上がった

のか下がったのか。そもそも『バリュー』はあるのか？」

「むう……考える」

もちろん俺としては、ただ暇つぶしのために話を逸らして遊んでいるだけなのだが、どうやら彼女は気づいていないらしく、宣言どおり真面目に考え始めた。

「考えた。けど分からない。……答え」

「言え、ということらしい。ややぞんざいに要求された。」

「答えなんぞ知らん。適当に言っただけ」

「……………は？」

冷静な彼女にしては、珍しく感情がこもった声だった。

「だ・か・ら……………答えなんぞ知らん、と。適当に言っただけし」

「つまり？」

オチのない話は許せないらしく、抗議の意思100%の視線がこちらに刺さる。『なにがなんでも結論を言わせてやる』と、そういう視線だった。

さて、どう『オチ』をつけたものかと考えているところで、ちょうど、時計がきっかり五時を示して、安っぽいチャイムの音が鳴った。

「そつだなあ……………とりあえず『この話に価値はない』と、そういうオチでどうかね？」

そう言って窺つと、彼女の瞳には、闘志の炎的なものが宿っていた。

「もちろん許すわけがない。……………仕方ないから、また明日、意地でも答えさせることにした。明日までにオチを用意しておくように」

結局オチが無い、ここはひとつ 『たとえ価値の無い話でも、明日の話には繋がってますよ』 と、そういうオチでどうだろう？  
……いや、ダメだ。また明日の放課後にボツをもらうのが目に見える。  
……なんとか考えなくては。

(後書き)

少々適当に書きすぎたかな？ と思いつつ。今日はこの辺りで。

感想・ご批評お待ちしてます。……まあ、あればですが。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8074o/>

---

価値

2010年11月9日07時38分発行